

平成29年度 第2回宇治市小中一貫教育推進協議会会議録（案）

会議名	平成29年度 第2回宇治市小中一貫教育推進協議会
日時	平成30年3月7日（水） 18時00分～20時00分
場所	宇治市役所 6階 602会議室
出席者	<p>（委員） 榑原会長 薮副会長 松元委員 村田委員 井戸本委員 内田委員 川嶋委員 葛山委員</p> <p>（報告者） 有山（北宇治中学校）吉野（宇治小学校）</p> <p>（事務局） 岸本教育長 伊賀教育部部長 藤原参事 瀬野教育支援センター長 福山教育支援課長 金久一貫教育課長 富治林学校教育課長 縄手教育総務課長 渡邊一貫教育課総括指導主事 姫野一貫教育課指導主事 大越一貫教育課学校教育指導主事</p>
配付資料	<p>○平成29年度第2回宇治市小中一貫教育推進協議会資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成29年度宇治市小中一貫教育中学校ブロック活動状況 ・平成29年度中学校ブロック年度総括表 ・平成29年度宇治市小中一貫教育推進協議会の活動報告 ・平成29年度宇治市小中一貫教育に係る視察受入状況 <p>○平成29年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告書</p> <p>○平成29年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告書（概要版）</p>

1 開会

- ・岸本教育長 開会挨拶
- ・小中一貫教育チーフコーディネーター紹介

2 報告及び協議事項

（1）報告1 平成29年度宇治市小中一貫教育の取組について

- ・事務局より資料に沿って報告・説明
- ・宇治ひろの学園より取組報告
- ・北宇治中学校ブロックより取組報告
- ・宇治黄檗学園より取組報告

（会長）

事務局と3名のチーフコーディネーター、ラーニングコーディネーターから各ブロックの取組をご紹介いただいたが、各委員から質問やご意見はないか。

（委員）

3つのブロックの報告には、いずれも「家庭学習」に関わる内容があった。家庭の状況も様々だとは思いますが、「家庭学習」のねらいとは、学校の授業内容を補完するものなのか、それとも、学習した内容をより深く理解するためのものなのか教えてほしい。

（小中一貫教育チーフ・ラーニングコーディネーター）

生徒の実態から、どこに焦点をあてて課題を設定するか、難しいところである。宿題を出すことについても、保護者から、「わが子に合った宿題を出してほしい。」という意見と「（宿題は）不要である」という意見の両方がある。

(委員)

学習への取り組み方など、小中が連携して進めてもらっているが、中学校ブロックごとのテーマや目標が違う中、分散進学する子どもに戸惑いなどはないのか。中学校ブロックごとに、特色を出せば出すほど、やりにくい状況が生じたり、違和感を感じる子どもがいたりしないのか。

(会長)

分散進学の解消は、すぐに解決できるものではないと思うが、これに関連して何か意見はないか。

(会長)

「家庭学習」は、どうしても学校の学習を補完する内容になりがちである。特に、中学校で教科ごとに宿題を出すと、全体で一人の生徒にどれだけの負荷がかかっているのか把握しにくい。(子どもにとって)過剰な負担とならないように、学校としてスタンダード化できないものか、小・中学校間で議論できればよいのでは。また、宿題が全員一律ではなく、個に応じた出し方というのは難しいのだろうか。

また、北宇治中ブロックの説明資料に「学びの10箇条」というものがあるが、目線や姿勢といった身体的な問題というのは、その子どもの特性や状況を考慮しない、画一的な指導という印象を受ける。一貫教育という意味は、「同じようにしていく」ことなのか、「違うけれども、つながりの中で理解していく、俯瞰的に自分の歩みを見つめ、見通しをつける」ことなのか。「スタンダードやシステム」という言葉と「つながりや交流」という言葉が、一貫教育の理解につながっていると思う。今後、10中学校ブロックの一貫教育の在り方をどのように考えればよいのだろうか、ご意見を伺いたい。

(小中一貫教育チーフ・ラーニングコーディネーター)

「学びの10箇条」の内容が正しいかどうかは、今後も論議が必要である。小学校は学級担任制であるため、時間の区切りが曖昧になりがちである。これに対して、中学校は教科担任制であるため、この違いに子どもたちが最も戸惑うところであると考えている。ここで挙げているのは、1つの目標、目安であって、小学生にも中学校の授業スタイルが分かってもらえると思う。小学校と中学校の違いを明確にすることがねらいのひとつである。

(委員)

以前から、どの中学校にも学習規律を定めた何箇条というものはある。かつて、学校が荒れていたときは、教師が個々のスタイルで(授業を)やっていたは対応しきれなかった。授業規律をしっかり身に付けさせるため、教師が共通認識すべきものとして作成し、教科の特性や指導方法に応じて、多少の幅を認めていこうという形になっていった。今は、個に応じた指導という観点が基本であり、旧態然とした内容は、見直していく必要がある。内容を精査するとともに、個に応じて柔軟な対応をすることで、すぐに解消すると思われる。

(会長)

形から入ることの大切さも理解できるが、学びということで注目するのなら、ある意味、身体を緊張から解放することが大切だと思う。だらけることは良くないが、「教室が和やかで、穏やかな空気が流れる雰囲気づくりをしましょう」というような目標とし、それが、小学校から中学校につながっていくのがよいと思うのだが。

(委員)

「一貫教育は、同じことをするのではない。つながりを俯瞰する。見通しを持たせる。」というのは、たいへん分かりやすい考えだと思った。宿題や授業をスタンダード化する取組が進んでいるが、これは、画一化することが目的ではなく、子どもに安心感を持たせるための手法であると考えている。小学校と同じ流れの授業を、中学校でも受けることができれば、違和感なく学習に取り組めるのではないか。小学校教員の授業の進め方は、個々に任されており、統一感はない。以前にも述べたと思うが、小中連携の前に小中連携が必要ではないか。学校によって異なる指導を受けた小学生を受け入れる中学校教員を困らせることになる。ただ、あまり窮屈に縛りをかけてしまうと、小学校教員の特性が失われてしまい、同じことをする一貫教育となってしまう。中学校教員の専門

性や小学校教員の繊細な授業づくりを互いに学ぶというところに落ち着かせるのがよいのではないか。

(委員)

中学校ブロックの夏季合同研修会で、「板書システム」や「授業システム」について検討したが、「授業の流れを統一する必要はない。教科によっては同じ流れで授業することはできない。」という意見があった。単に形を統一するのではなく、そのシステムが必要な理由やそこに至った発想を共通理解することができていれば、多少の違いがあったとしてもシステムの意味があるという結論に達したことが、印象に残っている。

(委員)

「やましろ授業スタンダード」は、新学習指導要領に対応した授業改善の視点ということで作成されている。小中一貫教育で行っている「板書カード」や「授業の流れを明示する」という取組は、視覚的に訴えるという点で、幅広い子どもの特性に対応する手立てである。このことを大切にしようということが理解されているならば、クラスや個別の状況に応じた合理的な裁量も生まれてくる。形を統一しようとするのが難しい。いろいろな子どもに配慮するという視点で、進めていくことができればよいと思う。

(会長)

年数を重ねていく中、経験が蓄積され、小中一貫教育について、それぞれが考えることはよいが、「スタンダード」や「システム」に注目する一方、別のことに目が向いた場合、イメージするものや実践が乖離してしまうのは、望ましいことではない。言葉は「小中一貫」でも、内容が異なることはよくないので、教育委員会の指導、支援のもと、答えが出なくても考える時間を設定することが大切だと感じた。

(2) 報告2 平成29年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート結果について(報告)
・「アンケート報告書・概要版」に沿って事務局より説明

(会長)

質問等ないか。

(委員)

アンケートの結果には改善されたところがあるが、先生方はそれを実感として持っているのか。現場で変化を感じ取っているのか。

(委員)

今回、アンケート内容が改訂され、結果の分析から、宇治黄檗学園の成果は、施設一体型であること、単に(小学生と中学生が)一緒にいるから成果が出ているのではなく、特徴を活かした取組の成果があらわれているということで、うれしく思っている。実感としては、納得できる内容で、校内の落ち着いた様子から、想定できた結果である。

(委員)

アンケートを取った生徒の状況によって変わることもあるだろう。例えば、中学生の兄や姉がいる、いないで、不安が減ったり、増えたりすると思う。実感といっても、生徒(入学した中学1年生)が緊張しているか、リラックスしているかといった雰囲気は分かるが、不安が減少しているか、どうかは、目に見えるものではないので、特に感じたことはない。

(小中一貫教育チーフ・ラーニングコーディネーター)

(宇治黄檗学園では)常に一緒に過ごしているということもあるが、様子を見ているだけではなく、行事に参加することなど、いろいろな取組の中で、(中学校での生活を)実感することがあり、

それが結果に表れていると思った。

(委員)

保護者から見ると、(宇治黄檗学園では)英語教育に力を入れてもらい、実際、力が付いたということもある。今後、新学習指導要領に移行する中で、道徳についても小中一貫教育の中で取組を進めていけたらよいと思う。今年も、連合育友会でも、小・中学校が連携したあいさつ運動の取組を進めたので、(アンケート概要版P8の「地域、PTA・育友会との連携」の項目の)結果にあらわれていることをうれしく思う。

(会長)

アンケートの実施時期が、6～7月というのは、理由があるのか。

(事務局)

中学1年生が入学後、一定の期間を過ごし、定期テスト(中間・期末)や部活動の経験も終わっているということで、実施時期を定めている。

(会長)

(アンケートの)データ集計や分析など、ご苦勞をおかけした。今後も蓄積して行ってほしい。

(3) 報告3 平成29年度宇治市小中一貫教育推進協議会の活動について(報告)
・資料14頁に沿って事務局より説明

(会長)

資料に従い、視察されてお気づきになったことやご意見などを伺いたい。

(副会長)

広野中学校ブロック(の夏季合同研修会)では、今日の報告にあったとおりの内容を拝見した。チーフコーディネーターの先生が、前任の中学校ブロックと比較しながら、そのよいところや至らないところを把握し、工夫しながらコーディネートされている様子から、コーディネーターの先生が、いろいろな(中学校)ブロックを経験されることも有意義であると感じた。

(委員)

私も広野中学校ブロックを視察したが、保護者の立場として、こういうこと(合同研修)をしていただいているのだと、感謝の気持ちが大きかった。先生方の様子を見て、子どもたちため、学校のためにと、いろいろ考え、話し合っていたいただいていることが、ありがたかった。このようなことを表に出すことはよろしくないのかもしれないが、どこかで(他の)保護者に伝えたいと思った。基本的にこのような取組は見えないものなので、(視察の)機会はありがたいことだった。

(委員)

同じく、広野中学校ブロックだが、(小中)一貫校と同様、長年の活動により、小中一貫教育が当たり前のように進められていることに感心した。

(委員)

南宇治中ブロックを視察したが、「過去20年間にわたる中国からの帰国者と地域とのパイプ役として、コミュニケーション(を図ること)の難しさの中、近年、これまでの取組の成果がやっと実を結びつつある。」と、校長先生から話を聞き、たいへんご苦勞が伺えた。中国からの帰国生徒と日本人生徒との交流や理解教育の取組など、(ブロックの)3校が一体となって、がんばっておられる姿、熱意をすごく感じた。(当日、)南宇治中の中文拳を、中学生が小学生に教える様子を見たが、とてもよい印象を受けた。

(委員)

私も南宇治中ブロックを視察した。困っていること（課題）があるから、（その解決のために）この取組を進めるといことがとても伝わった。生活の文化が違う2つの小学校が1つになることを、どのように（解決）すればよいかということから始まった取組が、子どもたちのために役立っている。今では、中文拳の部員が、平盛小学校よりも西大久保小学校の卒業生の方が多いということに驚かされた。課題から始めた取組がしっかり成果を上げていることに感銘を受けた。取組から始めるのではなく、課題から始めているというところが、本質であると感じた。

(委員)

分散進学する北宇治中ブロックを視察した。過去、6年間の積み上げが、研修会が（ブロックの取組として）定着している様子や運営のスムーズさから伺えた。分散進学校を抱えながらも、教員のモチベーションを下げないことに、かなりの労力を費やしていると推察する。やはり、どのようなテーマに沿って、授業を参観し交流するということ（が大切）だが、交流のみで終わってしまう段階が続いている。教員の異動や学校体制の変化などがあり難しいが、小小連携の視点や中学校教員の専門性から学ぶこと、小学校6年生と中学校1年生に絞った取組、（小学校と中学校が）同じテーマで研究を進めることなど、もう一步踏み込んだ取組など、働き方改革の視点からも過度にならない、やってよかったと（教員が）感じる研修会にしていく必要があると感じた。

(会長)

北宇治中学校ブロックと西宇治中学校ブロックを視察したが、随分と（学校間の）敷居が低くなったと感じた。（教員が）非常に慣れた感じで行き来されている。子どもたちの反応からも、とてもよい雰囲気であった。その一方で、授業後の研修会においては、遠慮がちに話をしている、その内容も感想の域を超えていないというのが印象的だった。授業はいろいろな内容に及んでいるので、全体を通してということは難しいが、ポイントを絞って、小中の違いやそれを打開する手立てなど、大げさに言うと、バトル、一戦を交えるつもりで（議論し）、もう少し関わりができると、冒頭に述べた一貫教育の意味の問い直しを含め、より実りがあるものになると思った。授業改善、教員の振る舞いや行動が変わっていくところまでには、まだ課題があるように感じた。

(委員)

東宇治中学校ブロックの半日入学を視察し、（近所の）子どもたちの話を実際に聞いてみた。「部活動の説明はありがたかったが、体験授業は、お客様用（特別な授業）だと思うので、実際の授業や学校の雰囲気を感じ取れるものの方がよかった。」と、数人（5人）の子どもが言っていた。また、「学校まで、これまでと違って遠かったが、中学校が身近になった。」との感想を聞いた。

(委員)

半日体験入学は、ずっと前から行っている。小中一貫教育にうまく取り入れられて、内容も以前から変わってきている。どこの中学校でも、同じレベルで実施しており、昔からの取組ではあるが、一貫教育の中でしっかりと定着していることを実感した。

(副会長)

木幡中学校ブロックは、雨天のため、部活動体験ができず、体育館で、部ごとのプレゼンテーションという形であった。伝える側も一生懸命で、聞く側も真剣に聞き入っていたので、よい関係であると感じた。体育館が、小学生で満員になっていたが、その大部分が御蔵山小学校（と木幡小学校）の児童で、分散進学する岡屋小学校の児童がかなり少なく、このアンバランスな状況も、入学後の（教員の）苦労につながっていくのかと思いながら見ていた。また、この半日体験そのものが中学校の取組であると感じられた。小学校の教員は、（中学校まで）引率するだけのために来たというように見えたので、（小中学校の）連携という点では希薄に思えた。

(委員)

宇治黄檗学園の視察は、宇治市で実際に使用している投票箱を使用した学園会の選挙だった。生徒の公約は、「学校をきれいにしたい。」や「仲間外れやいじめをなくしたい。」というものだった。新たなリーダーが決まっていく様子を見て、頼もしく感じた。

(事務局)

委員との視察だけではなく、年間を通じて、中学校ブロックの総会など、全中学校ブロックの状況を見て回った。それぞれの特徴があり、実際に見ることで、その取組内容がよく分かった。半日体験については、名前は同じでも、以前（6年担任として引率していった頃）とは全く違った内容であった。6年生の児童が、中学校の生徒と一緒に何かをするというようなことはなく、中学校の生徒指導の教員の話聞くだけで説明が終わるということもあった。今は、コーディネーターをはじめ、とりわけ中学校の教員が子どもを主体とした取組を進められ、参加する（6年生の）児童は、たいへん恵まれていると感じる。

(4) 報告4 平成30年度小中一貫教育の取組について

(会長)

来年度に向けて、何か提案などがあれば聞かせてもらいたい。

(委員)

ラーニングコーディネーターの配置は、順番が逆ではないのか。小中一貫教育に取り組みにくいと思われる（分散進学を含む）中学校ブロックが先ではないのか。

(事務局)

小中一貫教育の組織体制を活かして、学力向上に向けた取組を進めていくことを考えている。まず、宇治黄檗学園において、施設一体型という条件を活用して取組を進めていただく。そこでの成果や手法を、分散進学のない3中学校ブロックへ、そして、分散進学を含む6中学校ブロックへと、徐々に広げていくという計画にしている。

(副会長)

今日の協議会において、よく出てきたワードが学力向上であった。6年間、積み上げてきた成果の上に、次の目標、課題として掲げられたと思う。私も一保護者として要請してきたことでもあるが、一方で、教員の負担やプレッシャーにならないように、くれぐれもお願いしたい。よい意味で学力向上ということを浸透させてもらいたい。教員へのプレッシャーが、子どもたちに悪い影響を与えないように願います。

(会長)

小中一貫教育とは直接関係ないが、学校の研究発表会では、必要以上に教員が子どもを叱咤激励するという話を聞くことがある。今、生まれた子どもは、百歳まで生きるという時代でもあるようなので、長期的に学力を考えることも必要だろう。いろいろな目を注いでいただいて、小中（学校）の違いを活かすということも、広い意味での（小中）一貫であると個人的には考える。いろいろなアイデアを出し合って進めていくことができればよいと思うし、私たちがその様子を拝見できたらありがたい。これをもって、第2回推進協議会を終了する。

3 閉会

伊賀部長より閉会の挨拶